

アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習の試み

—アサーションに焦点を当てて—

高濱愛・田中共子

key words

アメリカ留学
ソーシャルスキル
アサーション
日本人学生

はじめに

民間企業が海外派遣予定者に準備教育を行う場合は、経営効率と利潤追求のため、業務遂行に支障ない状態を早急に確保できる、実践性と即効性が求められる。しかし企業秘密の保護の壁ゆえに、その異文化間教育の多くは非公開で、大学等が利用する道は閉ざされがちである。J.セルマーら (Selmer, Torbiorn & de Leon, 1998) は、海外勤務の社員に対する赴任前の異文化間教育の効果を展望する中で、それらの具体的な内容が必ずしも明らかにされていないと指摘している。

日本の大学でも短期海外派遣留学生には、実践的で即効性を備えた異文化間教育のニーズがあろう。彼らは初期にはかなり苦勞し、最後まで苦勞し続ける者もある (Takahama, Nishimura & Tanaka, 2008)。長期間を試行錯誤に費やすことも貴重な体験かもしれないが、限られた期間に幅広い体験や勉学に必要な時間を最大限確保するには、渡航後速やかに現地生活に慣れることが望まれている。我々はこうした観点から、効果的なプログラムを開発して、渡航前に提供し、彼らが有意義な留学だと認識でき充実感を感じられるような、留学サポートを考えていきたい。

1 研究の目的

我々は、問題解決的で、行動レベルのパフォーマンスに焦点を当てた異文化適応支援策として、渡航前の準備教育をとらえていきたい。そこで心理教育の分野で用いられるソーシャルスキル学習を、異文化間教育に活用しようと考えた。ソーシャルスキルとは、「対人関係の形成・維持・発展のために必要とされる行動 (田中, 1994, 3)」を指す。当該社会の流儀を取り入れた対人接触は、速やかな関係形成に役立ち、対人的支援はさらに適応を促す。短期留学の予定者を受講者に選

び、海外渡航直後から使用される重要なソーシャルスキルを理解し、身につけてから留学できるよう支援したい。今回の目的は日本人学生に、留学前に渡航先の社会文化的環境を想定したソーシャルスキル学習の場を提供することである。

大学における異文化間教育としてのソーシャルスキル学習セッションには、留学中の在日外国人留学生や周囲の日本人学生を対象とした例がある(田中・中島、2006;高濱・田中、2007など)。対象文化の文化特定の行動や、異文化接触に有用な文化一般的行動を含んだ課題場面を使って、模倣学習や社会的強化などの心理学的工夫を加えたロールプレイを行う。文化理解や文化学習の意欲、自信や安心感の向上が報告されている。本研究は、(1)留学予定の日本人学生を対象とした、(2)海外渡航前の時点の教育という点で新しい。海外の文化を対象に、将来の接触を想定した準備教育への反応を探り、この教育方法の意義と課題を検討したい。

学習内容としては、ニーズを鑑み、日本からの留学者が多いアメリカ留学に焦点を当てる。留学者の多くはアメリカ人の主張性の高さに戸惑うので、学習が必要だと指摘されている(田中、1994)。間接的で配慮に満ちた伝達を規範とする日本人には、アメリカでのアサーション(主張的行動)の要求水準の高さと要領は、文化特異的行動に映り、難易度も高い。今回はこうしたアメリカ留学用のソーシャルスキルの、いわば中核部分と見なされる主張行動の学習に焦点を当てて報告したい。実際のセッションでは、留学後の時間的進行に従って、初期は挨拶や自己紹介など対人関係形成の開始に関する比較的初級のスキル、次いで関係の維持や発展に関わる中級のスキルを学んだ。全体は長時間に渡るので、本稿では最も困難な問題解決や交渉の課題に焦点を絞り、易しい部分は稿を改めて報告したい。

2 研究方法

学習者

学習者は、日本のX大学の日本人学生6名(男性2名:S4、S7、女性4名:S2、S3、S5、S6)¹⁾。全員が20代前半の文系の学部生で、2ヵ月以内にアメリカの大学への短期交換留学が決定していた。留学先の大学で要求される英語力は、全員満たしている。海外の特定の国に、1ヵ月超の滞在を経験した者はいない。実施に先だって研究内容を説明し、研究協力への同意を得た。

セッションの手続き

2007年夏の某日、1コマ(90分)に1スキルを割り当て、3コマ分で合計3スキルを学習した。講師は本稿の第一著者と第二著者で、共にアメリカ留学経験者で

ある。記録等の補助者として、日本人学生2名を雇用した。X大学に留学中のアメリカ人交換留学生(男性2名、女性1名)には、ボランティアとして、ネイティブの視点からコメントしてもらった。各スキルの学習では、課題場面の説明後、1人ずつ自由に1度目のロールプレイをしてもらい、ビデオ録画を再生して振り返り、肯定的なフィードバックを出し合って、ネイティブの学生によるコメントを聞いた。講師のアドバイスの後、それぞれの工夫を加えて2度目の演技をしてもらった。これも再生、フィードバック、助言、説明を行った。この様子は2台のビデオカメラで撮影し、後に逐語録を作成した。説明や解説は日本語、ロールプレイやネイティブ学生とのやりとりは英語で行った。

課題場面

田中(1994)がアジア人留学生用にリストアップしたアメリカ留学のソーシャルスキルから、短期留学生に必要と思われる内容を選んで、実施の要領をまとめ、生活場面に合わせた場面設定を行った。3つの課題場面と考え方、行動の仕方は、表1の通りである²⁾。これらの中で、日本人が陥りがちな態度や考えを保留しつつ、当該の文脈で妥当かつ期待される行動を理解する。そして自らの権利を意識し、主張する責任は自分にあると考えていく。暗黙の察しや配慮を期待せず、意見を示して交渉を行えば、双方に納得のいく結論に至ると発想してみる。こうして日本の感覚では違和感があったり、要領がつかめないものでも、その文脈下では機能していくような認知と行動を具体的に知っていく。

表1 学習セッションで扱ったソーシャルスキルとその内容

スキル・A1「要求を伝える」

場面：試験に関して、先生に電子辞書の持込を許可してもらいたいという希望を伝える。

要領：授業に関して問題を感じたら、率直に先生に言いに行く。英語力が足りない自分が悪いから仕方ない、自分だけの特別扱いを要求したら図々しいなどと遠慮せず、ハンディに見合った配慮として堂々と交渉する。

スキル・A2「主張・交渉する」

場面：不良品の購入に関して店員に交換を求める。

要領：アメリカ人は日本人よりもアサーションを自然で当然のことと考えているので、積極的に交渉・主張してみる。ビジネスライクで正当な主張と捉え、明確に事実を伝えながら、可能な対応を落ち着いて話し合う。

スキル・A3「援助を依頼される」

場面：友人から日本食作りを依頼されるが、自宅にキッチンがないので、友人宅のキッチンを借りて作れないか質問してみる。

要領：相手から依頼されて断る時は、理由や代替案を明確に伝える。謝る一方や素っ気ない断り方にせず、自分の状況をよく説明して、一緒に対策を考える姿勢で建設的な方法を提案する。

教材と記録用紙

平木(2000)のアサーション訓練の考え方と、田中(1994)のアメリカにおける文化特異的行動のリストを元に、バインダー式テキスト「アメリカ留学のためのソーシャルスキル：挨拶からアサーションまで」を作成した。課題場面と要領、便利な英語表現を掲載し、メモ欄を設けた。学習者の反応を知るため、各スキルの学習終了ごとに、以下の問いからなる「セッション記録」への自由記述を依頼した。(1)1回目の演技と2回目の演技を比べて、どこが違いますか？ ①自分の演技について ②自分の気持ちについて、(2)2回目のときどのようにしようと思いましたか？、(3)3回目ができるならどのようにしたいと思いますか？

3 結 果

1 学習者による演技の自己評価

3つのスキル学習に関する自由記述には類似や重複が多く、まとめて集計した。“1回目と2回目の自分の演技の違い”(31個)は、①言語面の変化・5個(肯定的内容：表現の向上、内容の明確化等)、②非言語面の変化・10個(肯定的内容：相手とフレンドリーに接しようとした、アイコンタクトがとれた、笑顔が増えた等)、③心理面の変化・16個(肯定的内容・13個：自信を持って頑張ろうと思った、リラックスできた、楽しめた等。否定的内容・3個：緊張した、向上させようと少し焦った等)であった。言語面では、表現がよくなったと記しながらも、「満足はいきませんでした」と付記したものが1名あった。“2回目の演技で意識したこと”(16個)は、①言語面・11個(新たに学習した表現を取り入れた、1回目の演技とは異なる内容に挑戦した等)、②非言語面・4個(アイコンタクト、笑顔)、③心理面・1個(自信を持つ)であった。“次回への意欲や心構え”(13個)は、言語面(もっと主張したい、理由を明確にしたい等)が8個、非言語面(フレンドリーにする、楽しそうにする等)が4個、心理面(自信を持つ)が1個であった。

なお欄外に、「不良品の交換ではなくて返金を主張するパターンをやってみたい」と、更なる演技のバリエーションへの意欲を記したものが、3名にみられた。

2 ネイティブの学生による演技の他者評価

予備知識なしに演じた1回目と、助言を得て演じた2回目を比べたときの、向上点の指摘には共通点が多いため、まとめて集計した。およそ4種類に分けて記すが、Nはネイティブ学生、Jは学習者のコメント、数字はコメントした人数を意味する。①全体的な評価：大変自然(N4、J1)、流れがスムーズ(J4)、流暢な感じ(J2)、雰囲気がよい(J1)、問題は皆無(N3)、実際に使えそう(J1)。②学習

者の印象：フレンドリーで愛想がよい(J4)、話しやすそう(J1)、カジュアルな感じ(N2)、元気で明るく大変丁寧(N1)、とても礼儀正しい(N1)、姿勢がよい(J1)、落ち着いている(J2)、前回より緊張せず(N1)、自信があった(N3)、熱意を感じた(N1)、正直(N1)。③表現の仕方：自分の情報や理由が言えていた(J2)、言いたいことが明確で内容をうまく発展させた(J1)、自分のアレンジが加えられていた(J1)、相手の好みを聞いた(J1)、誘い方がよい(J1)、説明が詳しい(N1)、内容が豊富(N1)、簡潔(N1、J1)、センスの良い言い方(N1)、自分でもこう言う(N1)、表現が丁寧(J3)、表現が適切(J3)。④非言語的要素：アイコンタクトがある(J2)、笑顔がよい(N1、J1)。

なお演技者の自己評価が、ネイティブ学生の評価と一致するとは限らず、例えばS3は言葉につまったことを気にしていたが、ネイティブ学生は「よい演技であるから気にならない」と述べ、2回目は「とてもよい」とさらに高く評価した。ネイティブの学生のコメントは、「1回目よりもっと自信があって、とてもよかった」など、個別の単語や言い回しより全体の印象に注目する傾向があった。

3 学習者からの質問とネイティブからの助言

学習者からは、計10個の質問があった。言語面では、失礼な言葉か(2個)、英語でどう言うか(2個)、順序が妥当か(2個)、単語が適切か(1個)、類義語をどう選ぶか(1個)。非言語面では、声の大きさは適切か(1個)、授業後に先生に質問できるか(1個)。ネイティブの学生は、問題は無かったと答え、講師とともに場面に応じた答え方など、現実での適用に関する助言を加えた。

4 考 察

学習者は、自信を持って頑張ろうとするなど、意欲的な学習姿勢を記し、ロールプレイに積極的に取り組んだことが伺える。新たな表現を取り入れたり、より親しみやすさを心がけたりして、パフォーマンスに工夫を凝らして努力したと解せる。質問は具体的で、実施を想定して疑問を解決しようとする姿勢がある。

1回目と2回目の違いに関する学習者の記述は、言語面・非言語面・心理面にわたっており、多元的な学習が生じていることが分かる。この点では、異文化滞在対象者のセッション(田中ら、2006)と同様の効果が認められる。

自らの言語・非言語・心理の変化を、学習者が歓迎していたことは、この行動学習が主体的で肯定的なことを意味する。ミクロ面では語彙の増加や表現の洗練、マクロ面では態度や心構えの獲得が挙がる。ネイティブの学生の評価は総じて高いが、マクロレベルのコメントに終始したことは興味深い。対人関係では全体的

な印象が残りやすく、細かい語彙や文法に拘泥して萎縮するよりも、実際の人づきあいでは、好感を持たれる態度で大意を表現することが肝要だと、参加者に実感されたと思われる。今回の焦点は、正確な言語表現より、駆使できる何らかの手段で意志を伝え合い、相互交流を通じて対人関係を形作っていくことである。

学習者は、総じて自身の演技が向上したと捉えているが、一部緊張による不十分なパフォーマンスや、残る課題の記述がみられる。行動リハーサルは、反応が自然に出るまで繰り返すことが望ましいが、2回のロールプレイではまだ不十分なのだろう。だが文化差を行動レベルで理解して、認知的再体制化、つまり考え方の枠組みを構成しなおして、期待される行動を具体的に試すことで実感を得た。そして文化的行動を観察して察知しながら、少しずつ行動形成していく要領とその過程を体験した。これらは学習態度自体の学習を意味しており、行動変容の契機を提供して、文化的行動の学習の始点に立つ心理教育 psycho-education といえる。安心や自信や動機づけ、学習態度などの心理的効果が顕著な学習形態と考えられる。渡航前に情報提供のオリエンテーションを実施する大学は多いが、HPなどで最新の実施例を見ても、語学教育と体験談を含む情報提供が主である。本研究は、心理教育の提案によって教育の選択肢を拡大するものといえるだろう。

本セッションの限界と今後の課題を述べたい。今回のアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションでは、学習者の属性や渡航形態が比較的均質で、似た留学生生活が想定できたため、遭遇場面を既設方式で設定した。受講者層を拡張する場合は、課題場面の多様化、選択肢の拡大を考えたい。あるいは多様な参加者の学習希望に即応するには、問題を自由に挙げてもらう中から課題を選んで随時設定するという、自在設定方式も可能である。

今回は、新たな教育方法を開発する目的で、セッション中の学習者の反応から、効果を探っていった。この学習方法が、学習の態度自体の学びを提供することと、行動学習のパターンが理解されていくこと、文化学習の意欲が高まることが示唆された。だが留学後のソーシャルスキルの実施、多様な場面への応用、対人関係形成への効果、適応状態は、更に留学期間に及ぶ縦断調査が必要である。文化学習によるステレオタイプ形成への否定的影響の可能性についても、介入実践に続く適応調査が解明の手がかりを提供しよう。本稿では、行動の選択肢の増加が、行動の自由をもたらすという立場に立っている。新たな行動を知らなければ、母文化に基づいた行動しか選択し得ず、自らの行動のインパクトにも気づけず、相手の行動を誤解する危険も増す。この意味で文化学習には、問題の予防という利点が付随する。なお近年の社会心理学では、多様な接触を繰り返すことが互いの偏見の低下に繋がるとされる。文化行動の取り入れは、初期の対人接触の困難や

力関係の差を低減する方略として期待できる。対人接触が開始されれば、相互的な交流へと深化させて、現実的な印象に修正する機会も持てるだろう。今回は探索を中心としたが、今後は数量的測定を含む精緻な効果測定を工夫し、科学的な検討を続けて、日本からの留学生の送り出しに貢献する道を見つけていきたい。

付記

本研究は、科学研究費補助金(萌芽研究 課題番号19653099 研究代表者 高濱愛)の助成によって行われた。

〈注〉

- 1) S1は参加予定であったが、当日欠席したため省いた。
- 2) Aは上級(Advanced)レベルの意である。先立って学習したスキルは、初級・Bレベルが笑顔で視線を合わせて話す、挨拶する、話しかける、中級・Iレベルが質問する、聞かれて意見を言う、である。

〈引用文献〉

平木典子(2000)『自己カウンセリングとアサーションのすすめ』金子書房。

Selmer, J., Torbiorn, I. & de León, C. T. (1998). "Sequential Cross-cultural Training for Expatriate Business Managers: Pre-departure and Post-arrival." *The International Journal of Human Resource Management*, Vol. 9, No. 5, London: Routledge, pp. 831-840.

高濱愛・田中共子(2007)「短期留学生と日本人学生を対象とした混合クラスにおける異文化間ソーシャルスキル学習セッションの実践」『留学生教育』10号 67-76ページ。

Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008). "The Influence of Social Skills to Get Social Support on Adolescents during Study Abroad: A Case Study on Japanese Short-term Exchange Students." *Journal of International Student Advisors and Educators*, Vol. 10, Tokyo: Council of International Student Advisors of National Universities, pp. 69-84.

田中共子(1994)『アメリカ留学ソーシャルスキル 通じる前向き会話術』アルク。

田中共子・中島美奈子(2006)「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」異文化間教育学会編『異文化間教育』24号 異文化間教育学会(アカデミア出版会) 92-102ページ。

(たかはま あい 静岡大学国際交流センター准教授 異文化間教育学)

(たなか ともこ 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 社会心理学・異文化間心理学)